

福岡県立糸島高等学校 郷土博物館所蔵資料紹介

米倉 法子（伊都国歴史博物館）

I はじめに

高校付属の施設として唯一「博物館相当施設」の指定を受けている「糸島高校郷土博物館」には、原田大六氏をはじめとする歴代の関係者によって、多くの貴重な遺物が収集・保管されている。その一部は2016年発行の『福岡県立糸島高等学校郷土博物館公式ガイドブック』で紹介されているが、実測図等の詳細は記載されていない。

1997年に前原市立伊都歴史資料館の企画展「再見！糸島の博物館」を開催した折に糸島高校郷土博物館より古墳時代の収蔵遺物数点を借用し、資料調査を行う機会を得た。その時の実測図が未発表となっていたため、今回この紙面を借りて報告することとする。眠っている資料を公開することによって、僅かでも今後の研究の一助になればと願う。

社会体制の大変革期ともいわれる古墳時代。糸島地方では現在まで、この古墳時代を象徴する前方後円墳が60基以上発見されている。糸島の前方後円墳は古墳時代前期のものが多く、しかも大形である。このことは、伊都国と初期の大和政権との密接な関係と伊都国の北部九州地域における盟首的な地位が弥生時代に続いて保たれていたことを意味し、同校博物館には当時の繁栄を示す銅鏡、石製宝器類、埴輪などに加え一貴山銚子塚古墳の石室の石材、木棺材、水銀朱、人骨片などが収められている。

古墳時代の後半期には、糸島地方だけでも総数千基とも言われる多くの横穴式石室の古墳が造られている。多くは群集墳丘の規模も小さく、開墾などで石室が露出したことで正式な調査を待たずに遺物が掘り出されることも多々あり、博物館の収蔵品の中にもこのような古墳に副葬されていたと思われる須恵器等が多くある。今回紹介する遺物も出土地が注記されているにとどまるものである。他地域から持ち込まれたものである可能性もあるが、当該博物館の古墳時代資料に限って概観すると、ほぼ糸島地方で採集、出土したもので

構成されていることから、無記載の資料も糸島地方出土のものである可能性が高く、資料的価値においては注目に値するものが多い。

II 資料

今回紹介する資料は石枕1点、鉄刀および刀装具6点、陶質土器・須恵器8点である。

1 武具

刀身1点・鏢3点・切羽1点・柄頭1点があるが、このうち鏢1点・切羽・柄頭は鍍金装で、刀身とセットと考えられる。

<鍍金装小刀>

糸島市志摩久米に所在する社古田^{しゃこた}1号墳出土と伝わる。同古墳は円墳とされ、資料4点は石室から出土したとされているが、詳細な出土状況はわからない。

・刀身（第2図－1、巻頭図版4）

小型の鉄刀で、全体に鍍金がひどく朽ちかけている。残存長18.5cm、身幅2.7cm前後、厚さ0.7cm前後、茎幅1.2～2.0cm前後、厚さ0.5cmを測る。茎には目釘孔と思われる箇所が2カ所あり、随所に木片が遺存している。

・鏢（第2図－2、巻頭図版4）

長径5.9cm、短径4.6cm、厚さ0.3cmを測る。鉄製の地金に鍍金を施したものである。鍍金は表裏2面の他に外側面部にも施されている。

・切羽（第2図－3、巻頭図版4）

長径4.9cm、短径3.0cm、厚0.25cm。表裏2面に鍍金が施されている。片方の面には、若干ではあるが黒漆らしきものの遺存がみられる。

・柄頭（第2図－4、巻頭図版4）

厚さ1mmほどの鉄板が全体として握り拳のような形状を呈したもので、柄頭の一部と思われる。全体の長さが5cm前後、幅2cm前後に復元できる。外面に鍍金を施し、ほぼ全面遺存しているが、一部赤錆が浮き出ている。いわゆる頭椎刀の柄頭と考えられる。

<鐔> (第2図-5・6、巻頭図版4)

鉄製で、推定長径8.0cm、推定短径7.0cm、厚さ1.7cm (5) と推定長径7.0cm、推定短径5.8cm、厚さ0.8cm (6) の計2点である。どちらも錆がひどい。出土地は不明である。

2 土器・陶器

<統一新羅系陶質土器>

蓋1点と高坏2点がある。

・蓋 (出土地不明) (第3図-1、巻頭図版4)

口径13.0cm、器高5.8cm、外面は暗灰色、内面は青灰色で、外面に自然釉が疎らにかかる。蓋の天井部にはつまみの周囲に印文とコンパス文類似の文様をめぐらす。内側は水滴形の印文14カ所、外側は円文に重なるように描いた、半円2個と点によるコンパス文類似の文様で、21カ所である。半円2個は右半→左半の順に描かれている。

・高坏 (出土地不明) (第3図-2、巻頭図版4)

口径13.1cm、底径7.5cm、器高6.4cm、色調は暗灰色で口縁と脚部の周縁は青灰色を呈する。第2図-1の蓋とセットと思われる。

・高坏 (出土地不明) (第3図-3、巻頭図版4)

口径11.0cm、底径5.8cm、器高6.4cm、色調は灰青色、脚部は暗灰色で坏部内底と脚部外面に濃緑色の自然釉がかかる。脚部に2カ所の方形スカシがある。

<百済系陶質土器>

・瓶形土器 (第3図-4、巻頭図版4)

糸島市加布里城山出土とされる。加布里城は現在の加布里行政区の南にそびえる標高123.4mの城山^{じょうやま}を中心に築かれた中世山城で、この尾根筋や山腹から横穴式石室墳が数基確認されており、その一基から出土したものかも知れない。口径5.4cm、器高8.6cm、色調は青灰色。焼成は良好、胎土は精良で1.0mm以下の白色砂粒が若干混じる。胴部には線刻による文様があり、ヨットを描いたようなその文様は中央縦線→左縦線→右縦線→横線の順に描かれている。第3図-5の流れを組むものと考えられる。

・瓶形土器 (出土地不明) (第3図-5、巻頭図版4)

口径4.4cm、底径7.7cm、器高12.1cm、色調は全体的に赤褐色で、色ムラがある。焼成は良好で胎土に1.0～2.0mmの白色砂粒を少量含む。底部はケズリの後ナデ調整を施す。その形状から百済の系譜をひく土器と考えられる。

<須恵器>

糸島市長野出土とされる須恵器が3点ある。昭和49年刊行の『前原町文化財地名表』には長野1号墳から須恵器と土師器が出土し、糸島高校が所蔵する旨の記載がある。博物館には他に「長野」出土の記載がある土器はないため、これらの土器がこの古墳から出土した可能性が高い。『地名表』に付された『地図』にマークされた地点付近(長野1199番地)には、現在でも花崗岩の転石が畑の傍らに積み上げられており、この地に横穴式石室墳が築かれていたことをうかがわせる。

・蓋 (第3図-6、巻頭図版4)

口径13.5cm、器高2.8cm。色調は青灰色。焼成良好で、胎土に1.0～2.0mmの白色砂粒を含む。天井部付近に粘土クズが付着している。国産須恵器と思われる。

・高台付坏 (第3図-7、巻頭図版4)

口径15.3cm、高台径10.0cm、器高6.4cm。色調は青灰色。焼成良好、胎土に0.5～2.0mmの白色砂粒を含む。底部付近はヘラケズリ痕を残す。国産須恵器と思われる。

・人物線刻長頸壺 (第3図-8、巻頭図版4) ①

高さ19.9cm、胴部最大径15.8cm、口径8.7cm。底部から肩部にかけては直線的で肩部に明瞭な稜を形成し、内傾して頸部にいたる。頸部は中ほどから口縁部にかけてラッパ状に開き、口唇部では断面が平坦面を有す。外面底部はヘラ切り後ナデ、胴下半部で手持ちヘラケズリ仕上げが行われる他は横ナデで仕上げている。人面は壺の肩部に縦3.8cm、横6.5cmに線刻されている。右斜め前方から描いており、頭部の輪郭を円状に一筆で描き、顔は目、鼻、口を書き込むが、口は鼻下で考錯している。古代人物画では、斜め方向からの描写は珍しく、希少な資料であろう。

3 石枕 (第3図-9、巻頭図版4)

糸島市篠原にある前原中学校東側の丘陵上の箱式石棺で出土したと伝わる。『前原町文化財地図』では、現在の前原中学校正門の北東160mの丘陵頂部に出土地が表示されている。石枕は阿蘇溶結凝灰岩製で、長さ17.6cm、厚さ6.9cm、重さ2.7kgを測る。人の頭ほどの石塊を半裁し、研磨により平坦加工し、頭部を乗せる部分を窪ませている。窪みの周囲は縁取りするように一段高く削り出している。

同校博物館には、佐賀県境にある長須隈古墳から出土した舟形石棺があるが、この石棺の石材は、比較的近隣で取れる松浦砂岩を利用しており、本資料とは異なっている^②。

III おわりに

今回紹介した資料は、詳細な出土地点や出土状況が明らかではないため、一次資料とは言えないものの、いずれも糸島地域の古墳時代を考える上での特徴を有している。

鍍金装の小刀はいわゆる頭椎刀と考えられる。頭椎刀は、6世紀後半から7世紀初頭頃、地域の首長墓から出土する。同時期前後の糸島地域では、福岡市西区元岡古墳群で圭頭大刀・文字象嵌入り大刀が出土している^③。古墳時代終末期の糸島を考える上で、本資料も重要な一例と言えよう。

統一新羅時代の陶質土器は完形で出土すること自体がまれであり、百済系土器とともに墳墓の出土であろうか。

単体で作られた石枕は極めて珍しい。古墳時代九州において、石枕は4世紀代後半から出現する。熊本県向野田古墳^④の石枕は舟形石棺に伴うものであり、同古墳からは竪穴式石室控積内の屑石に混じって石枕未成品1個も検出されている。唐津市谷口古墳では、長持形石棺の床面に作り出している^⑤。5世紀代中頃以降になると肥後を中心に発達する横穴墓や横穴式石室内の石屋形内において石枕が作り出され、これらの横穴墓や石室には往々にして装飾が施されており、これらは組み合わせとして中北部九州一円に拡がっていくが、い

ずれも作り出しの石枕がほとんどである。

単体の石枕としては、熊本県氷川町竜北高塚古墳出土品^⑥、岡山県新庄天神山古墳出土品^⑦があるが、いずれも長方形にきれいに面取りをしている。

本資料は阿蘇溶結凝灰岩製であることが大きな特徴である。上述の通り、5世紀代になると、肥後の古墳文化が様々な形で北部九州や広く畿内まで伝播していく。三重県おじょか古墳^⑧は肥後型に似た石室を有するとともに、竜北高塚古墳と同様に直弧文を有した埴製枕が出土している。

6世紀代には福岡の石屋形などにも阿蘇溶結凝灰岩が使われているが、前期古墳において同石材を使用したものは未だ報告されていない。前述の谷口古墳・長須隈古墳の石材は地元産出の砂岩を使用している。

当資料は、箱式石棺から出土したと伝わる。箱式石棺は5世紀後半以降、急速に減少する傾向を示しており、下限を古墳時代中期に置くことが可能である。

以上の点を勘案すれば、当石枕は古墳時代中期に属する可能性が高く、肥後地域と何らかの接触があった首長層の墓と考えることが妥当であろう。5世紀代の横穴式石室である曾根狐塚古墳、井原南田古墳、西堂四反田1号墳、引ヶ浦古墳などでは床面に仕切石を並べて死床を設けており、肥後型石室との関連がうかがわれる。このことから糸島地域と肥後地域とは文化的つながりがあったといえよう。

表1 肥後南部の石枕を伴う石棺一覧表

番号	石棺・古墳名	出土地	棺種	石材種別
1	高塚古墳	八代市竜北町大字高塚	円墳・家形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
2	上北山王古墳	八代市竜北町大字野津	舟形石棺	
3	室ノ山二号石棺	八代市宮原町大字今	舟形石棺	第7期阿蘇溶結凝灰岩
4	大王山三号墳	八代市宮原町大字早尾	円墳・舟形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
5	高城山三号墳	熊本市小島町	円墳・舟形石棺	第8期阿蘇溶結凝灰岩
6	向野田古墳	宇土市松山町	前方後円墳・竪穴式石室・舟形石棺	第6期阿蘇溶結凝灰岩
7	鴨籠古墳	宇土郡不知火町長崎	円墳・竪穴式石室・家形石棺	第8期阿蘇溶結凝灰岩
8	吉野山山頂石棺	下益城郡城南町杉上	舟形石棺	阿蘇溶結凝灰岩

※高木恭二1981・1982・1983を参考に作成



第1図 前原町文化財地図（前原町文化財地名表付図）に加筆（1/25,000）
34：篠原箱式石棺（野線枠のなか）

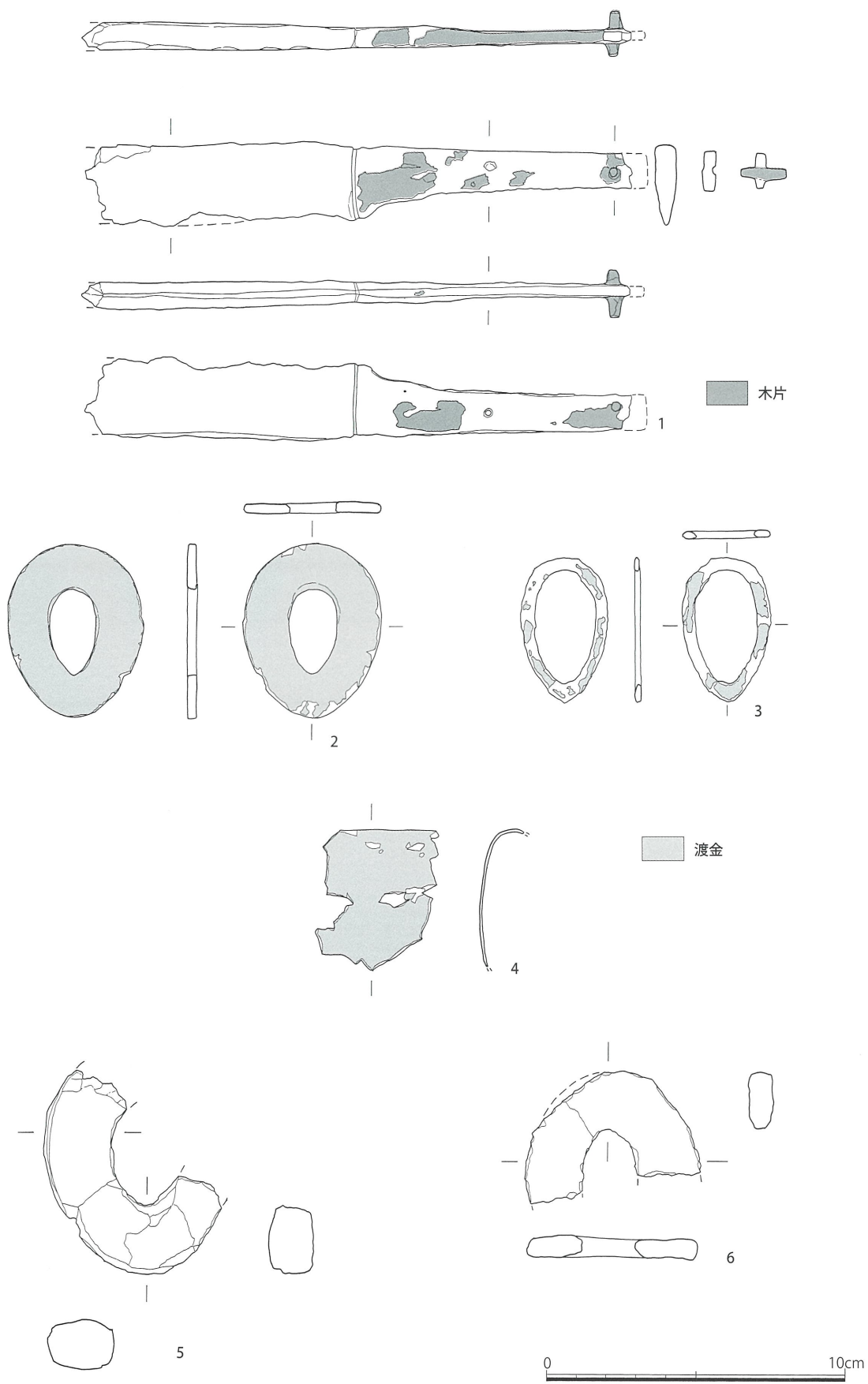
<註>

- ① 岡部裕俊・牟田華代子・比佐陽一郎・片多雅樹 2001 「飯原門口遺跡」前原市文化財調査報告書第72集
- ② 原田大六 1969 「邪馬台国のナゾにいどむ 伊都国王墓展」夕刊フクニチ・平原遺跡調査団
岡部裕俊・米倉法子 1997 「再見！糸高の博物館part1 古墳時代編」『糸高高校郷土博物館収蔵品展』前原市立伊都歴史資料館
岡部裕俊・堀本一繁・神野晋作 2016 「福岡県立糸島高等学校郷土博物館 公式ガイドブック」福岡県立糸島高等学校
- ③ 大塚紀宜 2017 「元岡・桑原遺跡群22」福岡市埋蔵文化財調査報告書1210集
- ④ 富樫卯三郎 1968 「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第二集による。
- ⑤・⑦ 倉敷考古館「蔵の内外よもやまばなし（111）石枕」www.kurashikoukokan.com/yomoyama/2011/111.html
- ⑥ 高木恭二（高木1983）による。
- ⑧ 三重県文化財データベース「おじょか古墳」

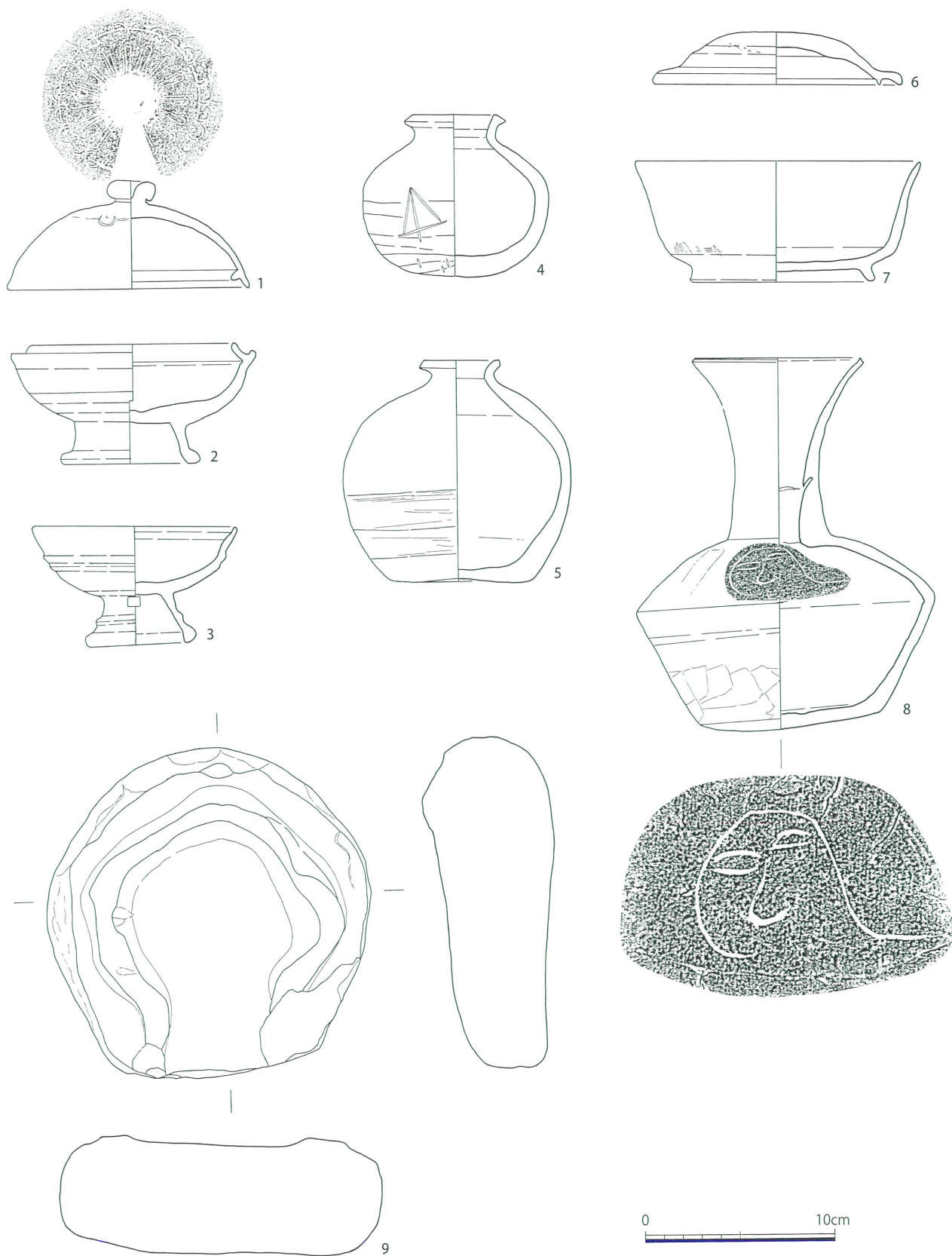
www.bunka.pref.mie.lg.jp/Miebunka/mobile/bunkazaiMobil/730977

<参考文献>

- 高木恭二 1981 「肥後南部の石棺資料（一）」『宇土市史研究』第二号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
高木恭二 1982 「肥後南部の石棺資料（二）」『宇土市史研究』第三号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
高木恭二 1983 「肥後南部の石棺資料（三）」『宇土市史研究』第四号 宇土市教育委員会・宇土市史研究会
原田大六・大神邦博 1974 「前原町文化財地名表」前原町教育委員会



第2図 武器実測図 (1/2)



第3図 土器・石枕実測図 (1/3)